講演要旨

環濠集落午王山遺跡

小倉淳一（法政大学文学部）

1　はじめに

午王山遺跡は関東地方における弥生時代後期の環濠集落の好例としてよく知られる存在である。しかし、遺跡内の小区域を対象とした調査が断続的に進行してきたこともあって、総括報告書（鈴木一ほか 2019）が刊行されるまではその全体像をイメージしづらかった。午王山遺跡が国史跡に指定されたことで遺跡の保護と整備が一層進むことが期待されるが、そのためには午王山遺跡の環濠集落像を再構成して広く共有することが必要であろう。

本発表では、総括報告書の拙稿（小倉 2019）から、環濠集落とはどういうものなのか、午王山遺跡の調査によって何がわかってきたのかを簡介し、関東地方を中心とする東日本の環濠集落の特徴にもとづいて午王山遺跡がどのように捉えられるのかに言及することで、その特質や意義に迫ってみることにしたい。

2　環濠集落とは何か

環濠集落は、朝鮮半島を経由して稲作農耕が伝来する際に、ともに伝わってきた集落の形態である。居住範囲を溝で囲って防御力を備えたり、自らの縄張りを示したりするものとみられる。集落のまわりに掘る溝を「環濠」と呼んでいるが、これは集落を全周するものと、全周せずに集落を区画するだけのものがある。特に後者は直線的な区画溝となる場合があって、「条濠」などとも呼ばれる。

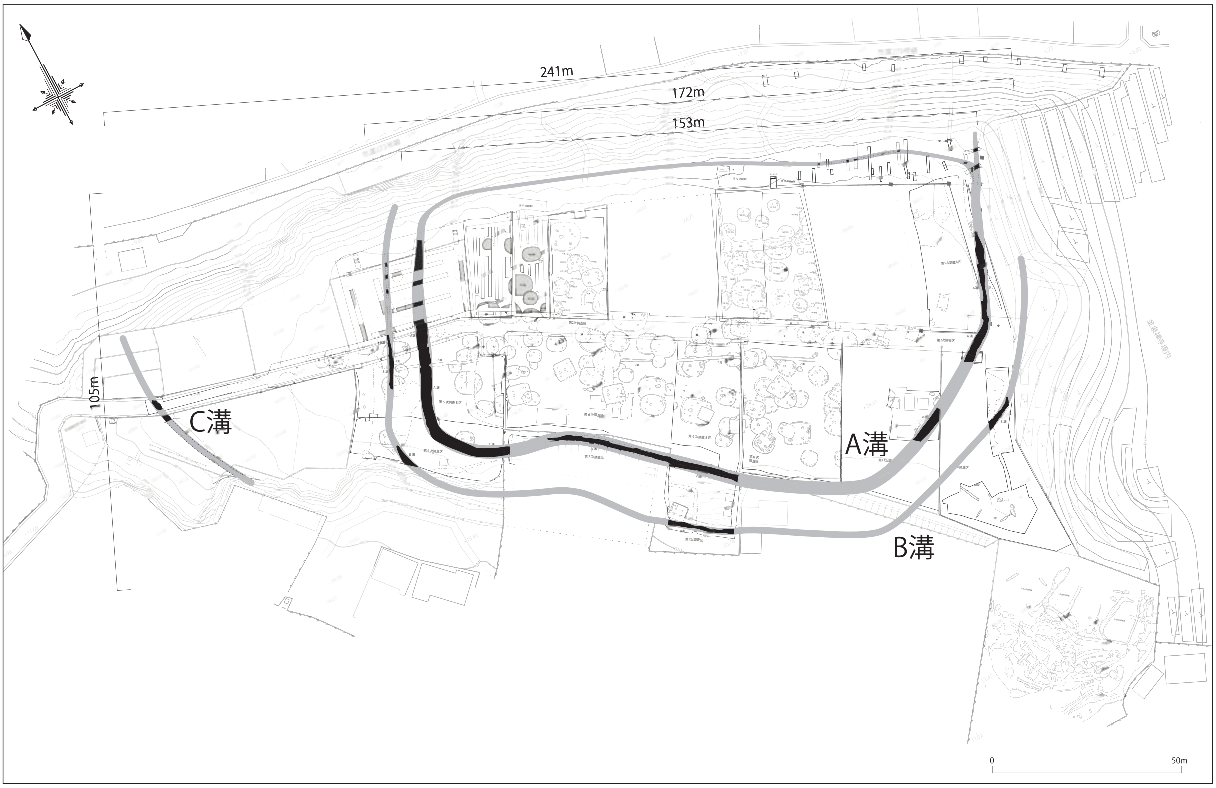
環濠は弥生時代のはじめに北部九州にもたらされる。水田をともなう集落として著名な福岡県板付遺跡も環濠を伴っている。この中には溝の幅や深さがきわめて小さいものも含まれており、板付遺跡の場合には水田に伴う水路が濠の役割を兼ねているとも考えられる。

大型の環濠集落には防御機能が伴う場合もある。佐賀県吉野ヶ里遺跡には大規模な環濠が伴い、防御力の高さが想定される。愛知県朝日遺跡（石黒ほか 1991）では溝のほかに逆茂木や乱杭といった防御施設も確認されており、守りを固めた集落の姿を確認することができる。しかし多くの環濠集落の環濠は形骸化したものであり、防御機能には疑問を呈さざるを得ない。こうした環濠のありかたは弥生時代の早期から認められ、環濠が防御一辺倒のものではなかったことが推測できる。すなわち環濠には、成員の共同作業によって集落の体裁を整え、居住範囲を明確に示すことによってそこに暮らす人々の一体感を高める役割があったとも考えられるのである。この傾向は関東地方において顕著であり、午王山遺跡の環濠集落も同様の意義をもっていたとみてよいだろう。

3　午王山遺跡の環濠集落

午王山遺跡の溝

午王山遺跡はすでに一部が削平され、遺跡南部を中心に旧地形が失われているが、これまでの調査成果によると、A 溝・B 溝・C 溝という 3 条の溝が存在することがわかる（第 1 図）。A 溝は午王山頂部の平坦面を中心に設置され、集落内の多くの竪穴住居を囲繞する環濠である。第 2 次・第 3 次・第 4 次・第 5 次・第 7 次・第 10 次・第 11 次調査などで検出され、2022 年夏には遺跡北側のトレンチ調査において溝の続きが確認された。A 溝の外側に、一見して A 溝と並行するように掘削されたようにみえる比較的規模の小さな溝が B 溝である。第 2 次・第 3 次・第 4 次・第 5 次・第 10 次調査において検出されており、現地踏査による地形確認の結果、この溝は集落全体を囲繞するものではなく、遺跡北端の崖で途切れるものとみられる。A 溝・B 溝の間隔は A 溝西側



第1図　午王山遺跡の環濠と条濠（A溝・B溝・C溝）

において最も狭く 7m 程度、第 3 次調査区や第 10 次調査区においては 12m 程度となる。これらとは別に、傾斜を強めながら下っていく午王山の西端部を東西に区画するように配されている南北方向の溝が C 溝であり、第 2 次・第 13 次調査区から検出されている。この溝は南部の崖面において断面が確認されており、等高線に沿いながら弧を描くように設置されたものとみられ、いわゆる「条濠」であろう。

環濠の時期

午王山遺跡では、A 溝においてその中層・上層を中心に土器の出土が顕著であり、B 溝では出土遺物は少なく、C 溝においてはほとんど遺物が認められない。

柿沼幹夫の成果（柿沼 2019）によれば、午王山遺跡は弥生時代中期後葉から後期前半までの集落遺跡であり、その主体は後期中葉前後にある。また、環濠は東京湾岸の土器型式では後期前半の久ヶ原Ⅱ式期古段階（南武蔵北部における下戸塚式中・古期）に掘削されるものとみられる。その後、B 溝の上に第 2 次 25 号住居址、第 5 次 B 区 68 号住居址の 2 棟が構築されており、溝の一部はこの時期にすでに埋没していたとも想定できる。続く久ヶ原Ⅱ式期新段階（下戸塚式中・新期）になると、埋没した B 溝の上に北から第 2 次 30 号住居址、第 4 次 52 号住居址が構築されている。さらに A 溝上には第 4 次 50 号住居址、51 号住居址が構築される。同じ久ヶ原Ⅱ式新段階でも後半期に属する下戸塚式新・古期には B 溝上に第 5 次 B 区 62 号住居址が構築される。

このように出土土器と遺構の重複関係とにもとづく集落の変遷過程からは、午王山遺跡の環濠が掘削されてから埋没するまでの時期が久ヶ原Ⅱ式期の中に収まること、掘削後にあまり時間をおかずに溝の一部が埋没し、そこに竪穴住居が営まれることが想定できる。なお、C 溝については出土資料が僅少であり、時期を特定することができない。

多重環濠とその規模

これまでの調査成果からは、午王山遺跡の環濠は、地形上の最高所と傾斜の変化を意識しながら配置されていることがわかる。A 溝は標高 25m におよぶ午王山最頂部を取り囲むように掘削され、その周囲のやや標高の低い部分に A 溝を取り巻

くようにB溝が掘削される。B溝とC溝との間隔は第2次調査区で約60mを測り、C溝はある時期の集落域の西端部を区画するかのようにみえる。A溝とB溝は溝相互の配置関係による限りA溝の存在を意識しながらB溝を掘削したものと考える方が自然であり、少なくともある時点ではA溝・B溝ともに機能していたと考えるのが妥当であろう。遺構・遺物および環濠の配置を検討することによって、午王山遺跡には二重環濠の時期があったものと推定できるのである。

環濠の規模については、A溝では長軸約153m、短軸約93mを想定できる。B溝の長軸は172mとなり、一回り大きな範囲を区画する。A溝の周長は約419m、区画された範囲の面積は約11,589㎡と算出できる。B溝は全周しないことが前提ではあるが、A溝の範囲も含めて14,000㎡程度の規模となると考えてよいだろう。これらの溝は午王山の頂部を囲み、集落の「縄張り」を明確化したものとも考えられよう。

なお、A溝の掘削土量を簡易的に推計すると921.8㎥、B溝では136.3㎥となる。B溝の規模はA溝に比べてきわめて小さいこともわかる。2条の溝の掘削土量を合計すると1,050㎥を超えることになる。

環濠の付帯施設

環濠の設営に関してたびたび問題となるのは排土の処理と土塁や木柵などの付帯施設のことである。午王山遺跡では目立った遺構は発見されておらず、今のところこれら施設の存在を積極的に想定・評価することはできそうにない。多重環濠という前提に立てば、一般に外側と内側の環濠の間、あるいは内環濠の内側に土塁が設けられることなどを想定できることもある。午王山遺跡の場合、環濠掘削当初の竪穴住居址はA溝から内側におおよそ5m以上離れて構築されており、空間的な規制の存在したほかに、排土を簡単に盛ったなどの可能性は残されるが、溝間の距離は厳密には揃っていないため、土塁を前提とした溝の構築がなされたのかどうか判然としない。

集落域と墓域

午王山遺跡では第1次調査区と第10次調査区から方形周溝墓の検出をみており、環濠外に墓域を営む集落構成であることも確認できる。方形周溝墓は四隅の切れる形態的に古いタイプのものと全周するものが存在するようであり、両者の間には時間差が想定できよう。前者は中期に多いものであるため、宮ノ台式期の集落に伴う可能性がある。これらが集落に近い場所に造営されていることは、午王山の頂部に形成された該期の集落の規模に照らしても妥当である。ただし墓に伴う遺物は少なく、土器から時期を追うことは困難であった。第1次調査区の方形周溝墓には環濠の時期に伴うものがあることも想定される。墓域は本来さらに広がっていたことであろうが、削平を受けて現存していない部分も多い。

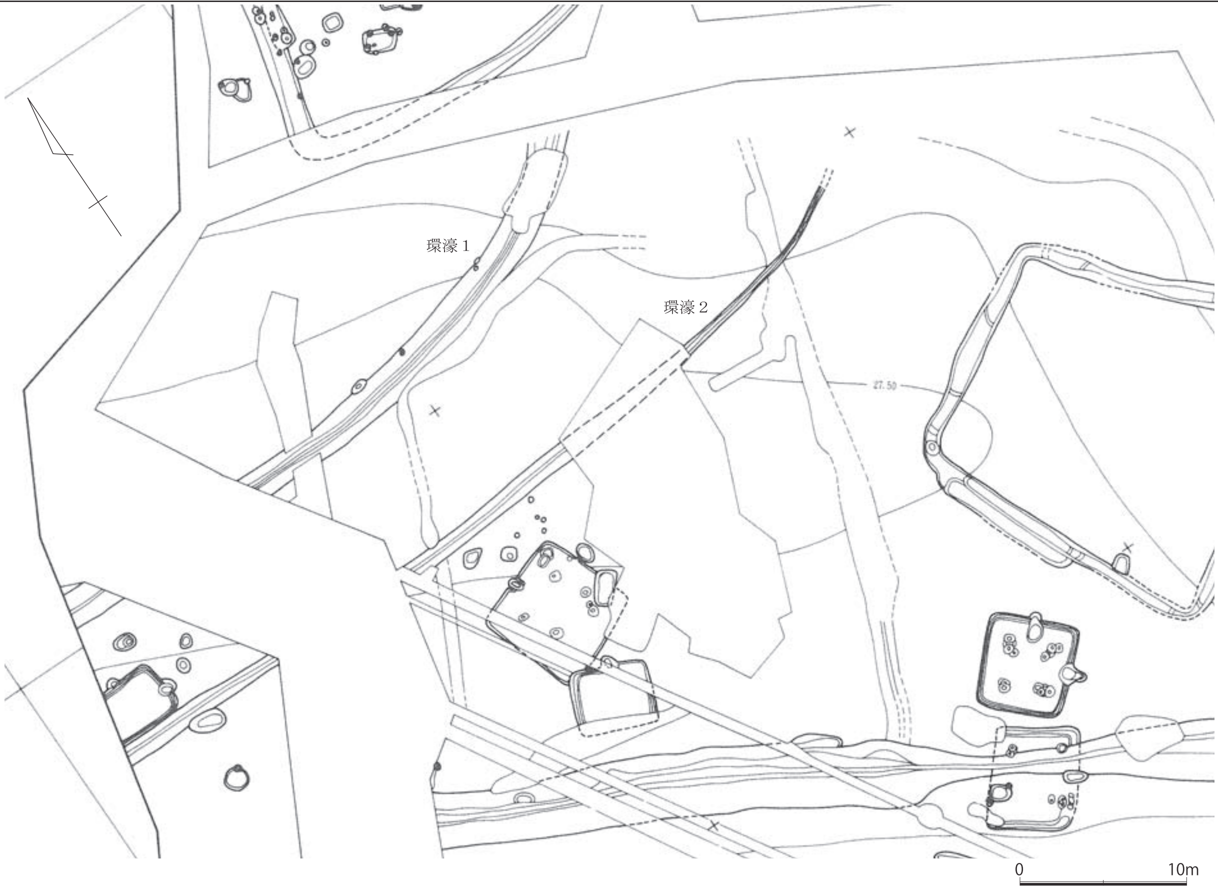
4　東日本の環濠集落と午王山遺跡

全体像のわかる環濠

東日本の環濠集落には巨大なものは少なく、関東地方においては環濠に囲まれる面積がおよそ30,000㎡までにとどまるものがほとんどである。一方、関東地方では遺跡の発掘例が多く、弥生時代を中心として溝を持つ集落の発見・調査例は200以上にのぼっている。その中でも環濠の全体像を推定できるものは現在のところ30例程度に限られており、午王山遺跡もその一例に加えられる。

環濠集落の登場と展開

関東地方の集落に環濠が登場するのは弥生時代中期後葉の宮ノ台式期になってからである。これはその直前の時期に東海地方からの影響を大きく受けて水稲農耕が本格化したことに直接の原因があるものとみられる。宮ノ台式土器は静岡県域の白岩式土器との関係が深い土器である。横浜市の鶴見川・早渕川流域では全面的に発掘された大塚・歳勝土遺跡（武井編1991，坂上・坂本編1975）をはじめとする弥生時代中期後葉の環濠集落が流域に点在する様子が判明しており、列島における弥生社会の内実を検討するための格好



第２図　花ノ木遺跡で検出された溝（新屋ほか 1994 を改変）

第３図　中里前原遺跡で検出された溝（秦野ほか 1980 を改変）

の素材を提供している。この時期に東京湾岸を中心とする南関東各地で環濠の形成が始まるものとみられ、千葉県域の養老川流域に属する市原台地、鹿島川が注ぎ込む印旛沼南岸域などでも典型的な環濠集落が形成される。ただし、中期末になると上総地域の一部を除いて多くの集落が一旦廃絶するようである。

後期になると再び集落が増加するとともに、環濠の造営も再開されるが、中期段階の環濠に比して、後期以降の環濠は面積および掘削土量の面で総じて小型化する。午王山遺跡の環濠が営まれるのは後期前半と考えられ、後期後半から古墳時代初頭にかけてはさらに小型化する集落と比較的大型の集落とに分化して多様化するものとみられるが、やがて消滅する。

これら環濠集落の立地は、関東地方では沖積地との比高差のある台地上にあるとみられていたが、その後沖積地に所在する集落の事例も認められるようになり、立地の多様性を強調する意見もある（浜田 2019）。

また、中部地方以東にみられる環濠集落のうち太平洋側に所在するものは千葉県域までにほぼ限定され、利根川を境として以東・以北にはほとんど分布しない。これは方形周溝墓を伴う集落遺跡の分布とも重なり、弥生文化の地域性を示す現象の一端とみられるものである。環濠の分布には、東海地方からの文化的影響を蒙りながらも、既存の文化要素を組み替えて対応していった関東地方の集団による主体的な適応の様子が示されているとみるべきであろう。

午王山環濠の特質と意義

午王山遺跡は弥生時代後期前半期に属する多重環濠集落遺跡とみられる。先述の通り、環濠で囲まれた面積はおよそ 14,000㎡となり、午王山遺跡の環濠は面積の点からは関東地方の弥生時代の環濠全体の中では比較的小型の部類に属することになる。しかしそれは中期の環濠集落を含めた理解であり、後期の環濠集落の平均面積（約 7,900㎡と想定）を上回っており、後期としては大型の部類に入る。そして残存率が高く調査による情報量の多い良好な環濠集落遺跡といえよう。

また、午王山遺跡の立地は荒川低地を見下ろす独立丘上にあり、特異な様相を示してもいる。丘の上を占めた集団が最高所をめぐる環濠を設置してその場所に継続的に居住した事例と考えられよう。環濠の断面幅や深さから実用的な機能について積極的な評価はできないが、後期としてはしっかり作られた環濠であるといえるのである。

さらに午王山遺跡の大きな特徴は、多重環濠にある。多重環濠そのものは九州地方をはじめとして多数確認されており、列島に伝来した環濠の情報に本来的に伴う要素のひとつとみられるが、関東地方ではあまり注目されてこなかった。その理由は明らかで、全貌の推定できる遺跡の中に、多重環濠とされるものがこれまでほとんど存在しなかったためである。多重環濠集落は弥生時代後期の関東地方に特徴的な事例とは言い難いため、午王山例が二重の環濠であるとすれば全体像を推定できる貴重な事例となる。埼玉県域においては和光市花ノ木遺跡（新屋ほか 1994）、さいたま市中里前原遺跡（秦野ほか 1980）で複数の環濠をもつ集落遺跡の報告があるものの、いずれも部分的な検出であり、環濠集落の全体像は判明していない。これらに比して午王山遺跡は全体像が想定可能で、なおかつ集落の変遷も追うことができる点においては、きわめてすぐれた情報を得ることができる遺跡であることがわかる。

さて、このように関東地方においては特異な存在といえる午王山遺跡であるが、環濠内の集落の様子は弥生時代後期における一般的な環濠集落と大きな違いはなさそうである。関東地方の中期の環濠集落では環濠内に竪穴住居址が密集するように分布し、倉庫とみられる建物も認められる例がある。また、一般的な竪穴住居址よりもかなり大型の住居址が内部に含まれることもあり、大型方形周溝墓が単独または少数、集落内に営まれる例も見受けられる。後期においても多数の竪穴住居址が残される傾向はあり、大型の竪穴住居址も存在するが、特殊な方形周溝墓などは顕著ではない。午王山遺跡も大小の竪穴住居址が高い密度で分布

するものであり、関東地方の環濠集落内部の基本的なありかたから逸脱するような性格はもっていない。

一方、東海地方においては静岡県伊場遺跡（鈴木敏ほか 2008）のように、一般的な集落から脱した姿をみせる多重環濠集落もある。同遺跡は同時期の大規模な環濠集落である梶子遺跡（井口ほか 2017）に隣接しているものの、掘立柱建物や周堤を持つ平地式の住居址によって構成されるなど、首長の居館としての性格を持ち合わせているようである（寺沢 1998）。

こうしてみると、比較的等質な居住施設を多数配置する午王山集落が独立丘状の台地に占地して多重環濠を掘るという状態は、後期集落として独特のあり方を示しているといえるだろう。中期以来の環濠集落内の住居配置を形態的に維持しつつ、関東地方には少ない多重環濠を設置することは、午王山における集落の一般性と特異性の両面をあらわしているように見受けられる。こうした点でも集落の全体像を推定復元することができる午王山遺跡は、東日本の弥生時代社会全体を検討する上で重要な事例といえるだろう。

5　おわりに

以上のように、弥生時代の環濠についての知見をもとにして、午王山遺跡における環濠の全体像と関東地方を中心とする東日本の環濠集落からみたその特質や意義について述べてみた。環濠集落には当時の社会関係が投影されていることは間違いなく、特に荒川流域の弥生時代後期社会をより深く検討していくために、環濠集落の解明は不可欠である。

今回、午王山遺跡が関東地方における弥生時代後期の環濠集落としては比較的大型であり、環濠そのものもよく掘り込まれていることが明らかとなった。また、類例の少ない多重環濠集落として復元することが可能であり、独立丘に立地するといった特異性を有することも想定できた。こうした特性は弥生時代後期の関東地方の社会を考察するために有効な視点を提供するものと考えられる。

今後は、午王山遺跡の環濠の姿をより鮮明にして集落内部の検討を進めるとともに、午王山遺跡を核とした荒川流域の後期集落遺跡の諸関係を検討し、その変遷過程に一定の見通しを立てることが求められよう。すでに関東地方においては中期の集落群に関する議論が深まりつつある。河川と可耕地の規模において鶴見川流域の社会を超えるスケールをもつこの地域で集落の動態を明らかにすることによって、集落研究にさらに豊かな知見を加えることができるものとみられる。史跡整備に伴う調査成果にさらに期待したい。

＜引用・参考文献＞

井口智博ほか 2017『梶子遺跡 18 次』浜松市教育委員会

石黒立人ほか 1991『朝日遺跡Ⅰ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 30　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

小倉淳一 2019「第 2 節　東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市　午王山遺跡総括報告書』和光市埋蔵文化財調査報告書第 66 集　和光市教育委員会

柿沼幹夫 2019「第 3 節　午王山遺跡出土弥生土器の編年的位置づけ」『埼玉県和光市　午王山遺跡総括報告書』和光市埋蔵文化財調査報告書第 66 集　和光市教育委員会

坂上克弘・坂本　彰編 1975『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅴ　歳勝土遺跡』横浜市埋蔵文化財調査委員会

鈴木一郎ほか 2019『埼玉県和光市　午王山遺跡総括報告書』和光市埋蔵文化財調査報告書第 66 集　和光市教育委員会

鈴木敏則 2008「第 5 章　時代別総括　第 1 節　弥生時代」『伊場遺跡総括編（文字資料，時代別総括）』浜松市教育委員会

武井則道編 1991『大塚遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ⅩⅡ　横浜市埋蔵文化財センター

寺沢　薫 1998「集落から都市へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店

新屋雅明ほか 1994『花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 134 集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

秦野昌明ほか 1980『中里前原遺跡　―第 1 次発掘調査報告書―』埼玉県与野市中里前原遺跡調査会

浜田晋介 2019「弥生時代の水稲単作史観を考える」『日本考古学』第 48 号